

剪定された枝

牧師 山本 護

「桜きる馬鹿、梅きらぬ馬鹿」。こう言い習わされているように、梅の木はしっかり剪定されることで生命力が強まりたくさんの実をつけます。桜はまったく逆で、不用意に枝おろしただけでも伐り口から雑菌が入ってほどなく木そのものが死んでしまう。健康のための剪定ということから、葡萄の木は梅に似ています。葡萄の木は極寒の今の時期に、おいおい大丈夫かいなと思うほど大胆に剪定をおこない、その年に伸びてくる新枝にたくさんの実をつけます。

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ(ヨハネ 15:5)」。とはいえ、つながっていればいいわけでもなさそうです。「わたしにつながっていながら、実を結ばない枝はみな、父(農夫としての神)が取り除かれる(15:2)」。たとえ話であっても、幾らかがっかりさせられてしまう。実を結ぶ枝も、実を結ばない枝も、神様にとってはどれも大切な枝ですよ、となればストンと腑に落ちるのですが、この話はどうもイエスらしくない。

このように私たちは、あらかじめ期待するイエス像を思い描いて、それに当てはまる御言葉を恣意的に選びます。そしてイエスの言葉を自分が期待する型にグイッと押し込めて早々に納得しようとする。「結ばれる実」とは何なのかを深く問いもせず、易々と他者や自分を失格にしたり合格にしたりします。

礼拝堂オルガンの横に置かれた大きな壺、梅の枝は活けてから3週間経ちました。プックリ蕾を膨らませて、その内の四つや五つは花を咲かせています。教会の庭や林が冬ざれて寂しい季節、この梅の少しずつの開花にどれほど慰められているでしょうか。

種類は甲州野梅。小粒の実が梅干しにされますが、枝おろしされたものが礼拝堂で花を咲かせようとしています。木につながってはいないので、さすがに「実」までにはなりません、これほどに私たちと柔らかく出会っています。

実にはならない花。葡萄のたとえ話の傍流を想像します。その冬の剪定で取り除かれて焼かれても(15:6)、人生はまだ続いてその次の冬もある。いや取り除かれて実にはならずとも、枝は活けられて花を咲かせるかもしれません。たとえ話の直路からは逸脱しますが、実を結ぶ枝も、実を結ばない枝も、すべての民にとってのキリストにはどれも大切なんじゃないか。イスラエルの葡萄にではなく、八ヶ岳の甲州野梅に教えられました。Ω

